

# 博士学位論文

『中国における犬と人間との関係の文化史的研究』

2018 年度

比較研究科

D16001

潘 小寧

指導教員 烏越 皓之 教授

# 『中国における犬と人間との関係の文化史的研究』

はじめに	1
第一章 「問題関心と研究史」	
一 問題関心	1
二 本研究の必要性	2
三 日本における犬の文化史的研究	4
四 中国における犬の文化史的研究	7
五 本稿であきらかにしたい問題点	10
参考文献	11
第二章 中国古代における犬と人間との関係	
一 動物と人間との関係	13
1 問題関心	13
2 動物の特殊な能力	14
3 犬とのつきあい	15
二 日本、とりわけ古代における犬	16
三 中国古代における犬の習俗	22
1 死者を守護する犬	23
2 忠実な「導犬」	24
3 犬が主人の身代わりになる	25
4 犬は魔よけ厄除けになる	26
5 太陽神と月神に関わる犬	27
6 犬と水との関係	28
7 犬を使っての雨乞い	30
8 草で編んだ犬の登場	30
四 結論	31

参考文献	34
<b>第三章 中国遼[契丹]における犬と人間との関係</b>	
一 関心の所在	38
二 契丹人の宗教と信仰	39
1 契丹人信仰の中心を占めるシャーマニズム	39
2 仏教の影響	41
三 占星に犬が登場する	43
四 動物にかかわる年中行事	44
1 白犬を埋める	44
2 人間世界の妖魔を慰めるための犬	45
五 実生活の中での犬の位置	47
1 猟犬・恩犬としての犬	47
2 見守る犬としての番犬	49
六 鎮墓石犬	50
七 遼代壁画	52
八 結論	57
参考文献	60

#### 第四章 中国「五代・宋元明清時代」における犬と人間との関係

一 関心問題	62
二 敦煌石窟狗の形象	64
三 魔よけ「犬」	66
四 子供と「犬」	68
五 龍のデザインと「犬」	73
1 宋元時代の犬形の竜(龍)紋様	75
2 明清時代における犬形の龍の紋様	76
六 犬食文化	77

A 宋代犬禁殺令について	77
B 清代の犬禁殺令について	78
C 日本の犬禁殺令について	78
七 獵犬から愛玩犬への変容	79
八 結論	80
参考文献	82

## 第五章 牧羊犬と狩獵犬に見るモンゴル牧畜民と犬との関係：

内モンゴルバイリン右旗での聞き取り調査を中心に

一 関心問題	84
二 調査地域の概要	85
調査地域の概要(内モンゴルバイリン右旗)	
三 狩獵犬及び方法	87
1 馬と獵犬	90
2 バイクに乗って獵狩りにする	
峰市巴林右旗巴彥塔拉蘇木達蘭花嘎查	90
3 社会環境の変化による獵犬の激減、	
伝統的な祭祀の減少	92
4 困獵風景	93
四 烏雲巴特尔氏について	94
五 モンゴル族と犬	98
六 獵犬の伝統的な訓練方法	100
七 牧羊犬について聞き取	102
八 環境の変遷	104
九 結論	105
参考文献	108

おわりに	111
------	-----

## はじめに

とても古い時代から、人は犬と強い関わりをもってきた。その理由は、現代と異なり、人間が即座に入手できる情報や交信が限られていたからではないだろうか。たとえば、危険が迫ったときに、犬は即座に危険なもの（野獣や他の知らない人間）が迫ってきていることを教えて（交信）くれる。犬は現在のアラームの役割をしてくれるわけである。また、本稿のいくつかの章で詳しく述べるが、犬は主人である人間だけではなくて、人間の財産（たとえば遊牧民の羊など）をも守ってくれる。また犬はどこに獲物のウサギがいるかを教えて（情報）くれるだけではなくて、その捕獲に協力もしてくれるのである。このばあいは、情報や交信だけではなくて、労力提供もしてくれている。ただ、労力提供は犬の固有の長所ではなくて、人間が家畜化した他の動物がさらに得意とするものである。

犬は世界各地にひろく分布しており、人間が生活しているところには、必ずと言ってよいほど犬がいる。人間にとって犬は大切な仲間と言える。人間は犬に訓練をして、さまざまな種類の犬の中から特有の性能を見出すように努めてきた。とくに遊牧民にとっては、犬は不可欠であり、とても大切である。そのため厳密な訓練方法をもっている。

本論文は五つの章から成り立っている。第一章の「問題関心と研究史」は次のような内容となっている。すなわち、中国と日本の文献を歴史的にならべてみると、犬は現在のようなただのペットではないことが分かる。それを文化史的な視点から見ると、犬は人間に対して、価値観を共有する大切な伴侶のようである。ではなぜ、そこまでに大切な伴侶となったのかを考えてみる必要がある。犬は伝統的に人間よりも、霊力、超能力を持っていると信じられてきた。また実際的な面において中国では犬の肉食の文化ももっている。以上をふまえながら、次章から文化の面においても、とくに情報、交信、生活という側面に意を注ぎながら、文化史的な分析をする。

第二章は、「中国古代における犬と人間との関係」である。中国・古代（「古代」というのは文明が成立してから近古唐滅亡九〇七年）までの時代としてここでは設定をする。）において、当時の中国人（とりわけ漢族）は犬

をどのようにイメージしていたのか、文化史的視点からその特徴をあきらかにすることを目的としている。とくにこの章では、長い歴史をもつ中国の古代では犬がどのようにイメージされていたのかというやや始原的な関心から成り立っている。そこでは動物というものがもつ特殊な能力、また人間がそもそも犬とどのように付き合ってきたのか、犬殉葬、犬の予兆、神とかかわる犬、犬と水との関係、などを述べている。

第三章は、「中国遼[契丹]における犬と人間との関係」である。遼朝[契丹](907年～1125年)遊牧民をとりあげ、そこでの犬と人間との関係を文化史的にあきらかにすることを目的としている。遼朝を構成した契丹は遊牧民なので、遊牧動物の管理のために犬をもっている。それは、「契丹犬」とよばれる有能な犬である。遼朝時代において契丹人はどのような固有の犬に関わる習俗をもっていたのであろうか。契丹族の犬についての考え方を整理しておく、契丹は伝統的にはシャーマニズムであり、その後、佛教が入ってきている。それを前提として、一つ目は犬は霊的な意味としてまとめられるものである。たとえば占星に犬が登場する。二つ目は実用性(狩猟・遊牧)からまとめられるものである。猟犬、恩犬としての犬などである。古代漢民族も遼代の契丹人も、犬は不可欠な生き物であり、同時に霊物でもある。とくに契丹人にとっては、犬についての一年間の祭祀は大切な年中行事でもあった。

第四章は、「中国[五代・宋元明清]時代について犬と人間との関係」である。中国「五代・宋元明清時代」(五代十国 907年-960年、宋朝 960年-1279年、元朝 1271年-1368年、明朝 1368年-1644年、清朝 1636年-1912年)の時代を取り上げる。時代、宗教および朝代の違いによって、漢民族犬文化史的の立場から、犬は人間に対して、どのような変容をきたしたのかを明らかにした。子供に対する怖い犬や犬型の龍、犬食文化などをこの章であつかっている。

第五章は、「牧羊犬と狩猟犬に見るモンゴル牧畜民と犬との関係:内モンゴルバイリン右旗での聞き取り調査を中心に」である。中国の遊牧民、遼代の契丹族の犬についての分析をおこなった。それは当然のことながら、文献による研究であったが、文献に基づいているために、牧羊犬や狩猟犬

について、知りたい事柄を十分に知ることができなかった。そこで、フィールドワークとして、現在の遊牧民族の調査を行うことにした。中国内モンゴルバイリン右旗の巴彥塔拉蘇木達蘭花において聞き取り調査を行った。伝統的な狩猟方法、牧羊犬トレーニングと猟犬の実行過程の両面からの聞き取りである。内モンゴルにおいては犬は牧羊犬が中心であるが、現実には、狩猟犬や番犬の役割もはたしていた。犬の養育もふくめて技術的な事柄も聞き取り得た。

結論的には、大きくは、犬は当初の予想よりも、信仰的な側面が強いことが分かった。もちろん、時代や地域によってその信仰内容は異なるのであるが、またおおまかな共通面もみられた。実用的には当前であるが、人間と犬との距離が大変近くて、親しさがあり、時代が現代に近づくほど愛玩犬としての役割が大きくなる。ただ、本来のこの距離の近さは、犬が人間がもっていない鋭い感覚(人間が感知しえない情報など)をもっていることに起因すると考えられる。

# 第一章 問題関心と研究史

## 一 問題関心

動物と人間との関係、とりわけ本論文のテーマである犬と人間との関係を考えるとき、情報と交信という2つの側面から理解しようとするのもひとつの方法であると思う。

とても古い時代から、人は犬と強い関わりをもって生きてきた。その理由として考えられるのは、現代と異なり、人間が即座に入手できる情報や交信手段が限られていたからではないだろうか。たとえば、危険が迫ったときに、犬は即座に危険なもの(野獣や他の知らない人間)が迫ってきていることを教えて(交信)くれる。犬は現在のアラームの役割をしてくれるわけである。

また、本論文のいくつかの章で詳しく述べるが、犬は主人である人間だけではなくて、人間の財産(たとえば遊牧民の羊など)をも守ってくれる。また犬はどこに獲物のウサギがいるかを教えて(情報)くれるだけではなくて、その捕獲に協力もしてくれるのである。このばあいは、情報や交信だけではなくて、労力提供もしてくれている。

ただ、労力提供は犬の固有の長所ではなくて、人間が家畜化した他の動物がさらに得意とするものである。馬や牛がそうであろう。また犬と同じように人に身近な猫はネズミなどを捕獲し、中国では農作物の保護する役割もかつては担っていた。このように多くの種類の動物たちが人間に貢献してきたのである。このような動物のうち、犬がもっとも古くから人間に身近で、また親しい。

犬はさまざまな役割を担ってきた。猟犬、牧羊犬、番犬、愛玩犬などさまざまに呼ばれることがある。それはそれぞれの役割を表した表現である。

犬は世界各地にひろく分布しており、人間が生活しているところには、必ずと



言ってよいほど犬がいる。人間にとって犬は大切な仲間なのだろう。以下の章で示すように、人間は犬に訓練をして、さまざまな種類の犬の中から特有の性能を見出すように努めてきた。とくに遊牧民にとっては、犬は不可欠であり、とても大切である。そのため厳密な訓練方法をもっている。

中国は古代からつねに遊牧民と接して生活をしてきたり、また遊牧民そのものが王朝を築いたりしてきた。その意味で、中国は日本や韓国、フィリピンなどとは大きく異なり、古代から現代に至るまで犬は極めて人間に身近な存在であった。そこで中国における人間と犬との関係史を理解する重要性を実感し犬を研究対象にしようとした。以上が本テーマについての私の問題関心である。

## 二 本研究の必要性

獣医学者の江口保暢によると、中国は「新石器時代に入って、山羊や羊を追っていた狩猟民が、犬を狩猟に使うことを覚えて遊牧民になった場合、犬を仕込んで牧羊犬にする。土地に定着して農耕民となっても、牧畜を覚えれば犬を牧畜に利用する。そして土地を離れて遊牧民となる場合は、この犬も連れていくので、犬を伴侶とする狩猟民由来の遊牧民には犬を食うという感情はけっして現われない」(江口保暢、2003、pp.27-28)と述べている。「遊牧民には犬を食うという感情はけっして現われない」という江口の指摘は、犬が大切な伴侶、すなわち先ほど述べた情報と交信という大切な機能をもっているので伴侶となる事実を明確に語っている。

また、民俗学者の菅豊によると、「動物は、現代社会において、単なる生物としての存在だけではなく、社会に埋め込まれた政治的、経済的、文化的存在としての重要性が高まっているのであり、動物を考えること、そして、人と動物との関係を考えることは、政治や経済、文化を考えることに他ならない。動物たちに

は、それが育まれてきた歴史と文化が刻み込まれており、動物たちを良くみると、その背景にある人間や社会を理解することができるのである」(菅豊、2009、p.1)と言っている。

このように、動物は社会に埋め込まれており、政治的、経済的、文化的存在と言えるようである。本論文はこのうち、文化的存在としての動物、そのうち犬を対象とするものである。

長い歴史的時間の幅で見ると、人間と犬との関係性は親密になりつつも、他方では疎遠になることもあるようだ。現代では、情報を知るための便利な交信方法が増えたため、それ以前の時代と異なって、犬を情報の媒介として利用することが減少し、犬はペット化していつている。

心理学者の鈴木光太郎は「動物の感情や知覚の内容は、推論や思考などが入り込まない場合には、そして人間でのことばに負う部分を切り捨てれば、ある程度類推可能かもしれない。感情について考えてみよう。痛み、悲しみ、喜び、愛情といった感情をあつかう脳の基本的部位は、系統発生的に見ても古い。その部位は、多くの種で特定されており、種間でも似通っている。さらに、感情はほとんどの場合、表情や身体に表出される。(鈴木建之、1979、pp.15-16)」と言っている。

すなわち動物がもつ痛み、悲しみ、喜び、愛情といった感情を人間はある程度類推可能であると指摘している。鈴木は動物も人間と類似の感情をもっていることを教えてくれている。これが犬をペットとして愛玩する理由かもしれない。

犬は他の動物に比べて人間に一番近い仲間である。サイエンスライターの支倉楨人によると、「生き物どうしがふれあって体温を感じあうのは、生きていく上でとても大事なこと。仲間からも人間からも引き離されたイヌは、精神的に落ち着かなくなり、人間の多くも病に倒れる。人間もイヌも、ともに生きる仲間を必要とする生き物だから(支倉楨人、2010、p.205)」と指摘している。これも同様

に人間と動物の距離の近さを言っている。

ところで、本論文で中国を例にして古代からの犬さまざまな機能を分析する。犬は、文化史的な立場から見ると、忠義精神、魔よけ厄除け、予兆能力、水の発見などの特性という役割として生活に役立ってきた。すなわち、動物と人間との関係を知ることは文化分析としてとても大切で研究が必要なことであるが、犬はとくに情報、交信、生活というような側面において、人間に身近な存在であるので、犬を文化史的に考えることは意味があるように思う。

### 三 日本における犬の文化史的研究

日本の犬研究について紹介する。ただ、犬についてふれている論文はとて多いので、犬の文化的特徴を明瞭に示している論文に限って、それをここで簡単に紹介し、日本では犬を文化史的に見てどのように理解しているのかをごく簡単に整理しておきたい。

日本においては、犬は神に近い存在とみなされていたようである。たとえば、谷口研語の『犬の日本史』によると、「古代人は一般に、動物は不思議な力をもつもの、との畏怖の念をもっており、とりわけ巨大な動物には神をみた。これにくわえて白という色は、清浄無垢を象徴するものであり、洋の東西を問わず、古くから神聖視されてきた。こういう次第で、白い動物は祥瑞とされるケースが多かった(谷口研語、2000、p.37)」と言う。また、谷口研語のこの論考には、犬が人間らしさ、霊力・呪力・超能力をもっていることが示されている。

永藤美緒の『『今昔物語集』に登場する犬』によると、犬は自然の荒ぶる神様としての側面がありつつ、他方、文化的な家の神として登場する犬がいることについて指摘している。また、当時は実際にそうであったろうが、死体や汚物を喰うものとして卑しまれた犬についても述べている。犬の持つ聖なる面と賤なる面

について記述している。ここでは、犬は自然の神でありながら文化の神であり、聖なる動物でありつつ賤であると指摘している。つまりは、両義性をふまえた境界的な存在としての犬だという指摘である(永藤美穂、1998、pp.42-53)。

鈴木健之によると、「人類生活史の大部分は狩猟生活である。この獣は猟犬として人類最初の家畜となった。この狩の名手は、人間の感知し得ぬ獲物のありかへ、時に地面に鼻をすりつけながら、ねらいたがわず導いていく。この動物は、抜群にすぐれた性能、とりわけ人間をはるかにしのぐ、地下深くにまで達する観念を持っていたのである。導犬の観念は、発達した嗅覚によって獲物を追いつめる犬、そこにそ発したのである」(鈴木健之、1979、p.221)という。

犬は人間に見えない世界や人間が予想できないところを探知する能力があるという。たとえば、人間は死後の世界、これは霊の世界であるが、犬はこの世界の使者であり、また案内者であると信じられてきた。それを鈴木は「地下深くにまで達する観念を持っていた」と表現している。この鈴木の見方は、後の章で検討する中国の文化史としての犬の捉え方と強く関連するところがある。

菊池健策の「イヌをめぐる民俗」には、3つに分けられる結論がある。第1に、犬は人間界と他界との往来することができる。第2に、犬は神様、たとえば穀霊、生命霊、祖霊、水の神、歳神などと深く結びついている。第3に、犬は畑作文化との深く結びつきがみられる。この第3番目の指摘が目玉を引く。

石田有沙によると、「日本の民間伝承においては、生命が誕生する時の導犬、魂を生に引き戻す存在としての犬を重要視するのに対して、世界の多くでは、死者の魂を導く存在としての犬が重視されている。この違いはどこから来るのかを明らかにすることである。また、日本の神話の中から、ユーラシア大陸各地の神話に見られる要素のみならず、犬の存在自体がこぼれおちた原因としては、仏教の影響、もしくは日本人の心性だけでは説明できない、別の何らかの意図が働いていた可能性も払拭できない。それが何であるかはまだ不明で

あるが、確実に存在していたことは疑いようがない」(石田有沙、2011、p.37)。  
傾聴すべき指摘である。

獣医史学の小佐々学によると、人の社会化と動物の家畜化は世界の文明や文化の起源であるという。そして、「世界最古の家畜である犬が、世界の歴史の中で、果たした役割は極めて大きかったということができよう」(小佐々学、2013、p.10)と言う。日本で、犬の墓は全国各地に約15ヶ所も分布している。「またこれらの地名に由来する犬塚という姓も珍しいものではない。また犬墓という地名は和歌山県と徳島県の2ヶ所にあるが、姓の存在については不明である(小佐々、2013、p.18)」。さらに小佐々学は、「日本でも最古の家畜である犬の歴史、特にわが国の愛犬や伴侶犬の歴史を、ヒューマン・アニマル・ボンドの視点から考えるきっかけになれば幸いである」(小佐々学、2013、p.18)と述べている。とくに犬塚など犬の墓に注目しているところが興味深い。

朱銀花は日・中・韓三国の言語における犬文化を考察している。その論文によると、「日・中・韓の三国では古く新石器時代から犬の家畜が始まり、食用のほかに狩猟や警備などの役畜として使役されてきた(朱銀花、2009、p.17)」。朱は、犬についてのことわざを中心にして、犬がどのように使われていたかを分析した。基本的には類似点が多いのであるが、最後に、ことわざは「文化や社会、民俗等の投影であって、そこからそれぞれの国の民族性を理解することができる。そしてこのようなことわざ表れる犬文化についての考察が、二千年余の長い交流を持つ中・日・韓三国の人々が互いに相手国に対する理解を深く、今後のさらなる交流の上で少しでも役に立てれば幸いである」(朱銀花、2009、p.27)という言い方をして、民族性の理解が相互の国の理解に役立つという立場を表明している。

## 四 中国における犬の文化史的研究

中国では古代から人間は犬と深い結びつきをもっていた。桂小蘭による『古代中国の犬文化』は、中国の文化史的な犬の研究のうち代表的な研究である。そこでは食用と祭祀の2点を中心に論じられている。祭祀については、以下の章で改めて詳しく述べるが、桂小蘭に依拠して食について要約で紹介しておく。

古代の中国人は肉食であることが多く、そのうち犬肉のランクはかなり上で、とても人気があったという。ただ一般の庶民にとっては、高価なので犬の肉を食べられる機会は少なかった。漢代になると、身分制度が少し緩み、犬肉を食べられる人々が増えたが、しかし庶民にとっては常食できなかつたという事実を彼女は述べている。さらに、「中国における犬肉の食習慣は歴史が長く、奥行きが深く、陰陽五行思想や忠君、敬老、養生および等級制度といった中国独特の礼文化に根ざしたものであり、まさに一種の食文化、食の思想といえる」(桂小蘭、2005、p.382)という。

さらに桂小蘭は外来文化による変化も指摘している。すなわち「中古代以降、北方の遊牧民族勢力の南下とともに入ってきた外来文化の衝撃、仏教不殺生思想の影響など、様々な要素のもとで、犬食の習俗のある地域は大幅に縮小しており、料理も多く変容した」(桂小蘭、pp.382-383)という。

邱奎福によると、「犬のよく吠える、よく噛み付くという特徴に関して日本人と中国人の認識は一致している」(邱奎福、2005、p.92)。しかし、中国と日本のことわざから見ると、中国人と日本人とでは多く違っている。その違いは、中国人がよく犬の肉をたべるが、日本人がほとんど食べないという指摘をしており、中国と比較して、日本では犬を食べることが少なかったことが知られる。

伊藤清司「犬と穀物」の論文において、犬が穀物を見つけるという穀物将来説話は華南・西南中国に集中的に見出されるという。中国犬についての穀物

伝説、洪水神話や犬祖神話などがあり、伊藤は「犬による穀物将来伝承は水稻栽培文化につよいかかわりを持つという解釈(松本信広ら)にも、また一つの条件づきで賛同できる」(伊藤清司、1967、pp.35-36)と犬が穀物をみつけるといふことと、水稻栽培文化とのかかわりの可能性に言及している。

松本信廣つぎのように述べている。「要するに槃瓠伝説は複合神話でありその中に犬のトーテム崇拜の如き形式を具へながら實は犬の靈性を通じて水の信仰と密接な関係があり後者を通じて瓠の崇拜が働いてをり恐らく後者の方が此種族の古き信仰を語るものではないかと考えられる(松本信廣、1942、p.784)」と指摘して、犬のトーテム崇拜的なこと、および水との結びつきに注目している。

李祥紅と王孟義の『瑤族盤瓠龍犬圖騰文化探究』によると、原始時代から現代犬の形の竜図が流行していたことを分かる(李祥紅・王孟義、2010)。

また譚歩雲の「中国上古犬耕的再考証」の論文では、殷(商)ひいては戦国時代、中国の一部の地域には犬が耕す田が存在していた。牛作の耕は犬の耕作の基礎の上で発展してきたという興味深い結論を出している。労力を出す家畜のはじめに犬をおいているのである(譚歩雲、1998)。

鍾晋蘭は中国の少数民族をとりあげた「閩西神犬崇拜及歴史文化意義」に、閩西地方でも神犬の信仰や伝説が多かった。神犬にたいして、崇拜信仰が強かったと指摘している(鍾晋蘭、2014)。

もうひとつ李祥林の少数民族についての論文を紹介しておこう。それは「人類學視野中羌族民間犬信仰及其文化析説」である。この論文は、中国少数民族(羌族)について、犬は民族人の昔の生活の中で、功用が広く、犬などの動物で占いをしている。犬も魔よけのものである。犬は羌族にとっては神聖な動物であるという指摘である(李祥林、2014)。

王鑫の「天狗食日(月)考」によると、天狗伝説は今までも中国で広く分布して

いる。漢民族地方だけではなく、少数民族地方にも流布している。この点については、本稿の第二章で改めてとりあげる。王氏これからは、「日本も視野に入  
って、インド・中国・韓国・日本の四国の日食・月食神話を比較してみたいと考  
える」(王鑫、2009、p.81)。それと、「元代の文化と関係があるように思われる。  
元の時代はモンゴル族という外来民族によって中国を統治されていた。モンゴ  
ル族は、儒教よりチベット仏教を重要視していた。よって、仏教の中の天狗のイ  
メージが広がるようになったのではないかと推測できる」(王鑫、2009、p.81)。  
蓋山林「犬岩画・犬・犬祭」の論文では、犬に対する崇拜と社会作用を分析し  
て、犬は古代で人間に対して、信仰生活上は重要な役割を果たしていることを  
明らかにした。この犬岩画についても本論文でとりあげる。

同様に本稿の第三章で、契丹をとりあげるが、この契丹について梁娜「淺談  
契丹之犬」では、人間の生産生活や精神生活において、犬の地位は重要で、  
他の動物では代替できない。契丹人の宗教信仰では、犬は妖魔を祓い、人間  
界を浄化してくれるという指摘がある。

さて、文化史上の起源については、魏書娟が「中国犬文化溯源」の論文で、  
犬は靈性のある動物であり、少数民族の部族が犬をトーテムとする。犬は普通  
の自然な動物ではない。犬は豊かな歴史文化の内包を持っていて、文化現象  
を形成している。犬は中国の古代社会にある一定の社会的地位を持っている  
と指摘している。古代において犬はすでに大切な役割をもっていたようである  
(魏書娟、2011)。

方法論にかかわることであるが、直江広治は『中国の民俗学』で、中国と日本  
の伝説に比べると、「昔話の国際的一致ということは、興味ある問題であり、そ  
の比較研究はもちろん重要なことである。しかし比較には、そのための方法が  
ある。一国の昔話にも盛衰のあったことを、われわれはまず知らなければなら  
ない。崩れ果てた末の形を比較してみても、それは問題を紛糾させさせる以外の



何物でもない。日本と中国の民俗を比較するためには、まずお互いの国における、個々の民俗の変化の歴史がまず跡付けられなければならないであろう。比較はそれからである。中国における、この狗耕田譚が日本の花咲爺説話と、いかなる関係にあるか」(直江広治、1967、p.58)という課題もその変化の歴史をふまえてから考えなければならないと指摘している。文化史を考えるときに大切な指摘であろう。

## 五 本論文であきらかにしたい問題点

中国と日本の犬についての研究史を調べると、犬は人間界で、重要な機能と作用を持っている。犬は菅の研究で紹介したように、政治的、経済的、文化的な存在である。すべての動物の中で、犬と人間との関係は総合的なのである。ただ本論文では、文化に焦点をしばっている。

中国と日本の文献を歴史的にならべてみると、犬は現在のようなただのペットではない。文化史的な視点から見ると、犬は人間に対して、価値観を共有する大切な伴侶のようである。ではなぜ、そこまでに大切な伴侶となったのかを考えてみる必要がある。

本論文の各章で述べることになるが、日本にかぎらず中国においても犬についての神話・伝説が多い。まず犬は人間よりも、霊力、超能力を持っていると信じられてきた。また実際的な面において中国では犬の肉食の文化ももっている。

文化の面においても、とくに情報、交信、生活という側面に意を注ぎながら、以下の章で文化史的な分析をする。

## 参考文献

### 日本文献(五十音)

- 石田有沙、「日本史における犬のイメージについての研究」、『寧楽史苑』、第56号、2011年
- 伊藤清司、「犬と穀物」、『史学』、第23号、1967年
- 江口保暢、『動物と人間の歴史』、築地書館株式会社、2003年
- 王鑫、「天狗食日(月)考」、『怪異・妖怪文化の伝統と創造—ウチとソトの視点から』、第45巻、2015年
- 菊池健策、「イヌをめぐる民俗」、『民俗学の進展と課題』、1990年
- 邱奎福、「動物にたとえた言葉に見る日中文化の差」、『Journal of Tourism Studies』、第4号、2005年
- 桂小蘭、『古代中国の犬文化』、大阪大学出版社、2005年
- 小佐々学、「日本愛犬史」、『日本獣医学会』、第66(1)号、2013年
- 朱銀花、「日・中・韓三国の言語における犬文化の考察—犬にまつわることわざを中心に—」、博士論文、京都大学、2009年
- 菅豊、『人と動物の日本史』、吉川弘文館、2009年
- 鈴木光太郎、『動物は世界をどうみるか』、新曜社、1995年
- 鈴木健之、「古代における導犬の観念について」、『犬東京大学芸大学紀要』、第2巻、1979年
- 谷口研語、『犬の日本史』、PHP研究所、2000年
- 直江広治、『中国の民俗学』、岩崎美術所、1967年
- 永藤美緒、「『今昔物語集』に登場する犬」、『日本文学志要』、第57号、1998年
- 支倉楨人、『ペットは人間をどう見ているのか』、株式会社技術論者、2010年
- 松本信廣、「槃瓠伝説の一資料」、『加藤博士還暦記念—東洋史集説』富山房、

1942 年

## 中国文献(ピンイン)

李祥紅、王孟義、『瑤族盤瓠龍犬圖騰文化探究』、民族出版社、2010 年

李祥林、「人類學視野中羌族民間犬信仰及其文化析說」、『民俗研究』、

2014 年第4期

魏書娟、「中国犬文化溯源」、『新鄉学院学報(社会科学版)』、第25号、2011

年

譚步雲、「中国上古犬耕的再考証」、『中国農史』、1998年第2期

鍾晋蘭、「閩西神犬崇拜及歷史文化意義」、『學術評論』、第2号、2014 年

## 第二章 中国古代における犬と人間との関係

### 一 動物と人間との関係

#### 1 問題関心

本章では、中国・古代において犬をどのようにイメージしていたのか、文化史的視点からその特徴をあきらかにすることを目的としている。ただ、この日本語の論文においては、理解を助けるために、日本との比較の上でその特徴を明らかにするようにしたい。その意味で比較文化史的立場も入っていると言えよう。

ただ、中国古代の犬についての史料は白い犬であったとか、また、犬を殺して人と共に埋葬したというような単純な記述のもので占められている。それに対して、日本の犬の研究はとても多様で深く、他の要因や環境との関連も述べられている研究もある。ただ、中国古代の犬の研究をテーマとする本章においては、中国古代の史料と即応する日本のデータのみを取り上げていて（たとえば中国古代に白犬という記述があれば、日本の古代に犬の色を述べた史料があるかなど）、日本の犬についての文化史的研究の全てをここでは紹介しているわけではない。

また「古代」というのは文明が成立してから中古（唐滅亡の九〇七年）までの時代としてここでは設定をする。

ところで現在、動物と人間との関係が改めて関心にあがっている。その理由は人間の孤立化などの進行にともなう「友人としての動物」というプラスの側面と、猿や鹿による農作物被害による「加害者としての動物」というマイナスの側面の両面がある(1)。ただ、歴史的にさかのぼると、それだけには限らない多様な、また別の動物と人間との関係が明らかになってくる。それはどのような

関係なのであろうか。

本章は、長い歴史をもつ中国の古代では犬がどのようにイメージされていたのかというやや始原的な関心から成り立っている。そして今後の筆者の研究としては、時代を少しずつ現代に移行させていくことを通じて、文化レベルでの犬と人間との関係をあきらかにしたいと考えている。

## 2 動物の特殊な能力

視野を広げて最初に、文化レベルでの、人間の動物理解について述べておいた方がよいだろう。

動物たちはこの世界で活気に満ちて生きているようにおもわれる。動物たちの形態や習性などは、明らかに人間とは異なっている。そしてある面で、人間よりもさまざまな優れた能力をもっているようだ。そのことを人間は古くから知っていた。

神話や信仰にはよく動物が出てくる。そこでは古くから動物には、不思議な霊力があると考えられていたようである。たとえば、後から具体的に述べるように、昔から、動物たちの霊力をいろいろと組み合わせて、固有の宗教やシンボルとしての神獣が生み出された。

さらに、動物たちの行動と声は神に通じると信じている地域も地球上に多くある。それらの動物の多くは、神に従属する「神使」とされている。日本の稲荷信仰のキツネもそのひとつであろう。ときに動物は神の化身であったり、あるいは動物自体が神とされたりする場合もある。人間の目に見えない神が、この世に良いことをもたらすために、動物を使者として遣わしたり、ときにはその動物が愛玩ではなくて、隠れた使者として共に暮らしたりもするとも信じられてきた。

また、信仰と離れて、現実的な事実として、動物はいわば人間の友達として

位置づけられてきた。人間は昔からいつも動物と「共生」してきたといえる。時代がかわっても、人間と動物の関係は親密であり続けている。その理由は、人間は動物なしの生活ではさまざまな不安があったからではないだろうか。人間と動物とはお互いに守り、助けられて生きているし、人間にとっては、動物は暮らしの楽しみのひとつでもある。もし人間が一人で自分のペットと一緒に深山のような大自然の中に身を置くと、動物が守ってくれていると感ずることができると思ふ。

古代から現代まで、人間は動物には特殊の感性があると認識している。たとえば、動物は人間より天気の変化や自然災害などの感知力がよい。雷が鳴り急に雨がふったりすることに対してでも、予知すると思われている。本稿で対象とする犬もそのような動物のうち、人間にもっとも近い動物のひとつと言えよう。これが人間と関係のある動物のうち、とくに犬を選んだ理由である。

### 3 犬とのつきあい

天候によって犬の行動が微妙に変化する事実は、犬と深く付き合っていない人でないと分からないかもしれない。天気予報という情報がなかった時代に、犬は人間に自然界の親友として、自然変化を教えてくれた。このように、環境世界の存在を「生きとし生けるもの」という感覚で見ている、動物は人間と対等なパートナーだったのだろう。

動物は人の心を癒やし、人間の精神生活を豊かにする存在であると考えられている。人間の犬に対する心理的効果に関する研究(たとえば中島由佳『ひとと動物の絆の心理学』)や、多くの文学分野の文献から犬に対する人間の生命観を明らかにできる。たとえば、滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』など。

また、動物の習性を知り、これを尊重して生活をしてきた地域の人々による犬に対する生命観や地域の伝統文化などがある。

動物は人間の「守り聖人」とされる。人間の魂も山川草木、全ての魂を平等に扱う。この生命観に基づき、心の癒しとしてお世話になった犬に対して感謝のために犬を供養する。現在一緒に生きている犬と、これからの幸せな日々を祈願するという感覚は、独特の犬に対する想いから起こることとあって良い。

このような人間の犬に対する考え方のうち、「問題関心」で述べたように、以下では、中国の古代を中心にして、中国古代の人間の犬に対するイメージをあきらかにしたいと思っている。

ただ中国古代の犬について記述する前に、中国古代の犬の特徴を分かりやすくするために、最初に日本における犬の研究を簡単に紹介し、そこで明らかにされた特徴をまとめておきたい。

## 二 日本、とりわけ古代における犬

前章の「日本における犬の文化史的研究」で、日本の犬の研究史を簡単に紹介したが、ここではそこで触れ得なかった事例を、中国の古代を念頭におきながら、比較の意味で紹介をする。

田名部雄一の『犬から探る古代日本人の謎』によると、犬は人類史で、最も古い歴史をもつ家畜のひとつであり、人間に最も近い存在である事が分かる。田名部は犬が人間を「肉食の猛獣から身を守ることに役立った」(田名部雄一、1985、p.25)と指摘しているように、犬はたんなるペット以上の大切な存在であった。

縄文時代にも多くの遺跡から犬の骨が出て来ている。しかも、墓に埋葬され

ているものが多数あり、人とともに埋葬されたものもかなりある。これは、縄文人にとって犬が重要な役割をもった家畜であったということであろう。弥生時代になると犬の骨が発掘される数は少なくなり、それも頭骨に傷のあるものが増えていくことから、犬を食べていたのではないかとも考えられている。また、犬に対する人間の意識は、日本の古代の資料にも多くあらわれている。

たとえば、『播磨国風土記』(託賀郡)には

「伊夜丘者 品太天皇 犬 (原註:名麻奈志漏) 與猪走上此岡 天皇 見之云射乎 故曰伊夜岡 此犬與猪相鬪死 即作墓葬 故此岡西有犬墓」。

(伊夜丘は、品太の天皇の 犬は(原註:名麻奈志漏)、猪と此の岡に走り上りき。天皇、見たまひて、「射よ」とのりたまひき。故、伊夜岡といふ。此の犬、猪と相鬪ひて死にき。即ち、墓を作りて葬しき。故、此の岡の西に、犬墓あり)。

品太天皇(ほむたのすめらみこと=応神天皇)に獵犬がいた。名は麻奈志漏(まなしろ)。犬は追っていた猪と一緒にこの岡に駆け上がった。天皇はこれをご覧になって「射むや(射よ)」とおっしゃった。だから伊夜岡という。この犬は猪と鬪って死んでしまった。そこで墓を作り葬った。だからこの岡の西には犬の墓がある。ここは、応神天皇に獵犬として尽くした犬の墓を作ったことが分かる。

『日本書紀』卷二十一、崇峻天皇即位前紀には

「爰有萬養白犬。俯仰廻吠於其屍側。遂嚙舉頭、收置古冢。横臥枕



側、飢死於前。河内國司、尤異其犬、牒上朝廷。々々哀不忍聽。下符稱曰、此犬世所希聞。可觀於後。須使萬族、作墓而葬。由是、萬族雙起墓於有眞香邑、葬萬與犬焉。河内國司言、於餌香川原、有被斬人。計將數百。頭身既爛、姓字難知。但以衣色、收取身者。爰有櫻井田部連膽淳所養之犬。嚙續身頭、伏側固守。使收已主、乃起行之」と記録をされている。

(爰に萬が養へる白犬有り。俯し仰ぎて其の屍の側を廻り吠ゆ。遂に頭を嚙ひ舉げて、古冢に收め置く。横に枕の側に臥して、前に飢ゑ死ね。河内國司、其の犬を尤め異びて、朝廷に牒し上ぐ。朝廷、哀不忍聽りたまふ。符を下したまひて稱めて曰はく、「此の犬、世に希聞しき所なり。後に觀すべし。萬が族をして、墓を作りて葬さしめよ。」とのたまふ。是に由りて、萬が族、墓を有眞香邑に雙べ起りて、萬と犬と葬しぬ。河内國司言さく、「餌香川原に、斬されたる人有り。計ふるに將に數百なり。頭身既に爛れて、姓字知り難し。但衣の色を以て、身を收め取る。爰に櫻井田部連膽淳が養へる犬有り。身頭を嚙ひ續けて、側に伏して固く守る。己が主を收めしめて、乃ち起ちて行く」とまうす)。

ここでは犬が「忠誠」を表す動物として登場している。この時代までには犬は、日本人にとって大事な存在になっていたのだろう。犬が主人の遺体を探して、それを収めるなどという美談は創作だろうが、それが美談として成立するには、犬の忠誠と、忠誠が素晴らしいものだという觀念が存在したからであろう。その論拠として畜産学の専門家の田名部も犬が「ボスに絶対服従する性格をもっている」(田名部雄一、1985、p.26)と言っている。『日本書紀』にはその他、犬についての多数の事例がみられる。このように日本の古代で、犬が登場する伝説が多い。

また犬は、靈的能力を持つ存在としてイメージされている。たとえば「花咲翁」、「竜宮童子」、「雁取翁」、「麦盗みと犬」などがある。前章でとりあげた石田有沙によると「日本史における犬のイメージについての研究」で、「花咲翁」と「雁取翁」では、犬は川の上流から、「竜宮童子」の犬は海底から現れるように、犬は水あるいは水界と結びついていると指摘されている。昔の人間にとって、水界あるいは山川の上流の彼方は他界であり、そこから流れ降ってきた動植物は人々に新しい生命と活力をもたらすという信仰があったことが記録されている(石田有沙、2011、pp. 24-40)。

また、人間が察知できない怪異を感じとり攻撃する犬の能力は、人間を邪悪なものから守護する力と相互に関係している。犬の属性としての辟邪能力は産育習俗と結びついている(石田有沙、2011、pp.24-40)と指摘されている。この産育の延長かもしれないが、日本では「犬張子」があり、それは子どもを見守るお守りだという(畑野栄三、2011、p.122)。また、子どもの初外出に際して、額に書かれた犬字の意味は魔除けであり、その根拠のひとつは犬の辟邪能力に求められるかもしれない。

伊藤清司の「犬と穀物」には「花咲翁」や「麦盗みと犬」の説明があり、そこにおける説話や穀物起源伝承から、犬、異界とこの世を越境する存在としての犬のイメージをくみとることが可能である。(伊藤清司、1967、pp.183-203)。

また山犬が三峰神社や御嶽神社などで「御神体となっている」(菊池建策、1991、p.530)という。それは犬が「人間界と他界との境界にあって、犬自身その両世界を自由に往来でき」(菊池建策、1991、p.541)るからだという。

『古事記』、『日本書紀』、『風土記』に見られる犬の記述の多くは、献上品としての犬、飼い主に忠実な犬など現実の犬の習性そのままの記録である。その一方で、『今昔物語集』の巻十四「元興寺蓮尊、持法花経知前世報語第十六」の説話では、犬は人間に生まれ変わる動物として登場する。

「今昔、美作ノ國ニ蓮尊ト云フ僧有ケリ。本ハ元興寺ノ僧也。而ルニ、本寺ヲ去テ、生国ニ下テ住ス。幼クシテ師ニ随テ、法花經ヲ受ケ習テ日夜ニ讀誦スルニ、暗ニ思エテ誦セムト思フ志有テ、年来誦スルニ、既ニ二十七品ヲ思エヌ。而ルニ、普賢品ヲ不思ズ。此ニ依テ、心ヲ尽クシテ普賢品ノ一々ノ句ヲ数万返誦シテ思エムト為レドモ、更ニ不思ズ。然レドモ、一夏九旬ノ間、普賢ノ御前ニシテ難行苦行シテ、此ノ事ヲ祈請フ。

一夏既ニ過ヌル間ニ、蓮尊夢ニ天童来テ、蓮尊ニ告テ云ク、『我ハ此レ普賢菩薩ノ御使也。汝ガ宿業ノ因縁ヲ令知メムガ為ニ来レル也。汝チ前世ニ狗ノ身ト有リキ。母汝ト共ニ人ノ家ノ板敷ノ下有リキ。法花ノ持者其ノ板敷ノ上ニ有テ法花經ヲ讀誦ス。初メ序品ヨリ終リ妙莊嚴王品ニ至ルマデ二十七品ヲ誦スルヲ、狗聞キ、普賢品ニ至テ、汝チ母ノ起テ去シニ随テ、汝モ共ニ去ニキ。然レバ、普賢品ヲ不聞ザリキ。汝チ前世ニ法花經ヲ聞奉リシニ依テ、狗ノ身ヲ轉ジテ、今人ノ身ト生レテ、僧ト成テ、法花經ヲ讀誦ス。但シ、普賢品ヲ不聞ザリシニ依テ、其ノ品ヲ暗ニ不思ト云ヘドモ、懃ニ今普賢ヲ念ジ奉ルニ依テ、暗ニ思ム事ヲ必ズ令得メム。專ニ法花ヲ持テ来世ニ諸仏ニ值遇シ奉テ、此ノ經ヲ悟ル事可得シ』ト云テ、天童失ヌ、ト見テ夢覺ヌ。其後、蓮尊宿因ヲ知テ、忽ニ普賢品ヲ暗ニ思ユル事ヲ得ツ。然レバ、喜ブ事無限シ。

此レニ依テ弥ヨ信ヲ發シテ、泣々ク礼拝シテ誦スル事不怠ザリケリトナム語り伝ヘタルトヤ」。

王貝の「中国と日本の変身譚の歴史的変遷に関する考察:狐、蛇、虎、犬、亀を中心に」は次のように、この物語を要約した。

「蓮尊という僧が『法花經』を習い、日夜読誦していた。長年読誦して

いるうちに、いつしか二十七品は暗誦できるようになったが、普賢品だけは暗誦できなかった。ある日、彼の夢に天童が来て、「あなたの前世は犬であった。あなたの母犬はあなたと一緒にある人の床下におったが、『法花経』の持経者が床の上において『法花経』を読誦していた。二十七品を読誦するのを犬はきいていた。ところが、普賢品の箇所まできて、母犬が起き出して出ていってしまった。それについてあなたも出ていったため、普賢品を聞かなかったのだ。あなたは前世で『法花経』を聞いたことにより、犬の身を変えてこの世で人間の身に生まれた」と告げた(王貝、2015、p.153)。

犬は感知能力と辟邪能力を持つ存在であると同時に、犬は転生してから、家畜として存在するということが多い。これは、仏教的輪廻転生観がより強く反映されているからではないかと結論づけられると石田有沙(石田有沙、2011、p.122)はいう。犬が人間に転生するパターンは、仏教思想からの影響である。また、白い犬が注目されたようだ。谷口は『今昔物語』などを分析し、「白という色は、清浄無垢を象徴するものであり、洋の東西を問わず、古くから神聖視されてきた」(谷口研語、2000、p.37)という。

これらをまとめると、以下のような特色を抽出できる。すなわち

- ① 犬は猟犬として利用された。
- ② 犬は忠誠を表す動物である
- ③ 犬は水となんらかの関係がある。
- ④ 犬は辟邪能力をもっており、産育習俗と関連性がある。
- ⑤ 犬は異界から新しい穀物の種をもたらす。
- ⑥ 白い犬が注目された。
- ⑦ 犬が御神体となることがある。それは犬が人間界と他界とを往来できるから。

これらの日本における特徴をふまえた上で、中国古代における犬についての考え方を分析する。

### 三 中国古代における犬の習俗

中国は古代から、犬の伝説、犬に関する習俗を多くもっている。また、華南とアジアに広く分布する犬祖とかかわる神話などの神話がある。たとえば、史料としては、『山海経』、『搜神記』、司馬遷の『史記』、應劭の『風俗通義』などが中国文化のなかでの犬にふれている。

また、中国における犬を中心に扱った代表的な論考としては直江広治の『中国の民俗学』、二階堂善弘の『アジアの民間信仰と文化交渉』、白川静の『中国の神話』、袁珂の『中国神話伝説』、桂小蘭の『古代中国の犬文化』、王麗華の「中国早期社会的犬文化」、陶立璠の「人類犬文化考証」、滕磊の「中国襖教芸術犬神形象」、柳士同の「従犬儒到儒犬」、譚步曇の「中国上古の再考証」、武庄の「先秦時期家犬研究的現状与展望」、崔逸飛の「中国細犬文化」、菅豊の「中国でつくられた動物たち」などがある。

それらの文献で共通している指摘によると、犬は古代から、中国でも、重要な役割の家畜であったことが分かる。初期の人類は犬を馴化して、4万年前から1.5万年前ぐらいの間で犬の馴養が成立した。犬は人間とコミュニケーションできる動物として、人間に対して、特別忠誠心も持って、二心はなく忠節をつらぬいているようだ。たとえば、「牧羊犬三千里、主を探す」、「義犬救主人」、「犬馬之勞」などの言葉で、よく犬が忠心を持っていると説明されている。

## 1 死者を守護する犬

古来、犬は人間と親しい関係があったため、犬は人間を守護すると信じられていたようである。中国の新石器時代から犬殉葬が行われている。古代においては、犬は人間より先に異常を察知すると信じられていた。そのため、犬は悪霊などを感知し、さらに変異を予知すると信じてられていた。

殷(商)時代に至って、犬を埋める風習ができあがる。古代祭祀における犠牲の内容は文献に多く記録されている。たとえば、甲骨卜辞に依拠した魏舒娟の研究によると、つぎのようであった。すなわち、風は天帝の使者、祭祀の時は二匹の犬を使う。古代祭祀においては、犬が“献”するものとして称えられる。鄭州の白家莊商夯地の壁は八個長方形の犬坑があつて、南と北二行と分かれ、東西にも広がり、全部で130匹ほどの多数の犬を埋めている。それは犬坑とよばれ、通常は数の多いところで、その数、30匹ぐらい。もっとも少ないところ6匹ぐらいである(魏舒娟、2011)。



図1 番犬石刻  
出典：『古代中国の犬文化』p.23



図2 番犬画像石  
出典：『古代中国の犬文化』p.26

図1と図2は中国漢代の番犬、図1は後漢の四川省彭州市太平郷、新都県江口の墓である。墓壁に番犬石刻がある。図2は後漢晩期、四川省樂山市柿子湾の墓である。墓の前堂の壁面で、番犬画像石が見つかった。これらの番犬について、「画像中に表現される犬については、主に2つのケースがある。第1は、ある現実生活場面中に表現され、犬はたんに附帯事物として表現されているに過ぎず、しかも現実生活中的の家畜の1つとして扱われている。第2は、犬は特に留意すべきモチーフとして表現される場合。多くは単独で表現されるか、もしくは重要な内容表現対象として登場してくる。その配置位置は、墓(穴)の門側、あるいは墓門に近い墓内の所で、特別な寓意を具えている。周知のように、人びとが家の中で犬を飼うのは、主として門を守り、悪霊の進入を阻むためである。(中略)四川東部のある僻遠地区においては、犬には鬼を見通す能力があり(通常の人にとっては、鬼は見えない)、またこれを追い払う力があると考えられている。そして犬が鬼と闘っているからだと言われている」(羅二虎、2002、p.145)。

犬は、地中の悪霊から死者を守護するもの、あるいは奠基すなわち地鎮の意味であると桂小蘭は『古代中国の犬文化』で、そのように解釈している。あるいは犬は冥界に行く死者を守護するのもかもしれない。

## 2 忠実な「導犬」

中国のさまざまな文献で、古代人は犬には「忠義精神」があるということがよく指摘されている。ここでいう忠義精神とは本来は人間に期待されるもので、国や友に忠義をつくすことであるが、それが犬にさえみられるという言い方になっている。たとえば、さきに紹介した王麗華の「中国早期社会的犬文化」に「甘効犬馬之勞」という表現が出てくるが、それは自分の利得を捨てて、懸命に働くことを犬と馬に例えた表現である。



また、『搜神記』(1964、pp.382-383)の巻二十忠犬(その一、二)につきのような記述がある。

その一「犬を飼っていたが、ことのほかかわいがって、いつもそばにおき、食事の時にはなんでも分けてやっていた。その結果、犬は恩を感じた対応をした。犬の報恩は、人間よりも立派である。恩を知らぬ人間は、犬にも劣るであろうぞ、ということで、この犬を葬ってやった。今でも紀南県には高さ十丈あまりの“義犬の墓”がある」という。

その二「(前略)すると犬が猛然と飛びかかって、蛇を噛み殺した。だが、隆は倒れたまま意識が無い。犬はそのあたりを歩き回りながら涙を流していたが、舟まで走って帰り、また草原にとって帰した。舟の中にいた連れの人たちが怪しんで、犬について行ってみると、隆が気絶している。そこで、家までかっついて帰ったが、犬は心配して餌を食べようとしない」。

これら二つの記述は犬の忠心を鮮明に、あるいは意図的に表現している。

### 3 犬が主人の身代わりになる

『搜神記』につきのような記述がある。「旅に出たが途中まで来ると、いきなり自分の犬が吼えだした。まるで誰かになぐられているように、ひどく吠える。しばらくして犬を見ると、犬は黒い血を一斗あまりも吐いてすでに死んでいた」(1964、pp.69-70)。これは自分の災いを予兆して、犬が自分の代理として死んだと解釈できる。



## 4 犬は魔よけ厄除けになる

犬が魔除けになると信じられていた。すなわち、犬は人間のために「除邪災難」をし、「家内安全」が守れると信じられていた。白犬の血をドアに塗って、不祥を駆逐する。これは中国での昔からの習俗である。たとえば、東漢の応劭の『風俗通義』には、「今人殺白犬以血題門戸，正月白犬血辟除不祥，取法于此」（『風俗通義』、祀典第八）という表現がある。日本語訳によると、今の人は白犬を殺して、その血を使って門に呪いを書く。正月には白犬の血で魔除けをするので、これから、このやり方ができた。犬（白犬）の血が「除邪災難」になると信じられていた。

また、犬は予兆吉凶天災地変の象徴作用以外にも、厄除けの役割もある。同じく『風俗通義』によると、「蓋天子之城十有二門，東方三門，生氣之門也。不欲使死物見於生門，故獨於九門犬磔禳」（『風俗通義』、祀典第八）とある。犬についての解釈があり、天子の住む城は全部で十二の門があり、東方の三門は活気の門。ここに死んだものが現われないように、他の九門の前に殺した犬を貼り付けて、災害を取り除くのだとこの著者は指摘している。

『史記』には、「作伏祠、作磔狗邑四門、以禦蠱災」（『史記』、封禪書）とある。日本語訳文は、「伏祠を作り、狗を邑の四門に磔し、以て蠱災を禦ぐ」。それらが災害を防ぐと信じられていたのである。

同様に、司馬光『資治通鑑』では次のような文章がある。

有青城妖人乘其聲勢，帥其黨，詐稱陳僕射，馬步使瞿大夫覺其妄，執之，沃以狗血，即引服，悉誅之。（『資治通鑑』、卷二百五十三、唐紀六十九、僖宗廣明元年）。

日本語要約は以下のとおりである。青城の妖人が偽って、陳敬瑄の名前

をかたったけれども、それを見抜いた瞿大夫が犬の血を注いで、その人物を殺した。この、「沃以狗血」とは犬の血を浴びせるという意味である。

また、つぎの文章も同様の機能を持つことがしめされている。すなわち、李昉・扈蒙・徐鉉の『太平廣記』、卷二百八十七幻術四、「青城道士」で、「少主知其妖，密使人擒之。累月不獲。後有人報云：已出笮橋門去。因使人逐之。乃以猪狗血齎行。至青城路上三十餘里。及之。遂傾血沃之」と記されている。この意味するところは、妖怪がたたるので、妖術をよくする者に対して、豚や犬の血を体中に塗りたくったところ、妖怪の法術の力がなくなったということである。犬は魔除け厄除けの機能を持っている。

## 5 太陽神と月神に関わる犬

「天狗食日(月)」という表現がある。古代中国では、天文学の知識が十分ではなく、「日食」と「月食」の現象は「天狗食日(月)」によると考えられた。この「天狗食日(月)」の伝承は、現在でも中国全土に広く分布している。漢民族が居住している地域のみならず、少数民族地方にもそれは流布していると指摘している(王鑫、2009、P.67)。

また「昔々太陽神と月神が、人間の起死回生の薬を盗んだ。人々は犬に太陽を追いかけさせた。しかし、月神と太陽



図3 天狗  
出典：『山海経』平凡社 p. 43

神はすでに薬を飲んでいたので、犬が月と太陽を噛んでも噛んでも、月と太陽は死なない。それでもこの犬は諦めない。常に月と太陽を食いつづけたのである。それで、日食、月食現象が現在でも起きるのである」(『紅河彝族辞典』、2000、p.172)。現在の中国でも、<我は天犬である。月をも食うし、太陽をも食う>という名句がよく知られている。このように、天狗食日(月)信仰は中国土に流布している。

## 6 犬と水との関係

中国古代で犬の伝承について典故がある。たとえば、中国の子供たちに人気のある昔話の二つとして、「狗耕田(犬が田を耕す話)」と「槃瓠伝説」がある。

『中国の民話』には、「犬が田を耕す話」について次のように要約する。昔、一軒の農家があった。其の家には二人の兄弟がいた。そのほかに年をとった父親がいたが、ある日、父親が死んだ。そこで、兄弟は財産を分けることにする。牛は兄に分け与える。弟は狗を得た。春になると、弟は狗に小さな犁をつけて、田を耕させた。弟はいろいろな方法をやって、お金持ちになった。弟がたちまち財産家になったのを兄が知って、そのわけ訊ねた。弟は兄に狗を貸してしまった。しかし、狗は思ったように働かなかったので、怒った兄は狗を打ち殺してしまった。弟はそれを聞くと、殺された狗のためお墓を作って泣いた。そして毎年この日には、亡き狗をとむらったのである。何年かたって、墓の上に数本の竹が生えた。弟はその竹をきってきて、それで魚籠を編み、魚捕りをした(伊藤清司、1981、pp.54-59)。

また、直江広治の『中国の民俗学』でも、中国の「狗耕田」について、「やはり古く犬の出現によって奇瑞が示されているらしいこと、さらにはその出現を水界に托する信仰がかすかではあるが認められることは、各地の資料の比較によっ

て、その大体を察することができる」と指摘している。(直江広治、1967、p.58)

『搜神記』には、槃瓠伝説についてつぎのように書いてある。「高辛氏に年老いた婦人があった。王宮に住んでいたが、耳の病気にかかって長いあいだ苦しんだのを医者で治療して、繭ほどの大きさの虫をほじり出した。婦人が帰ったあと、その虫を瓠の種子をいれるざるの中へいれ、盤をかぶせておいたところ、たちまち犬に変わってしまった。その毛なみには、五色の色があった。そこで、盤瓠と名づけ、飼っておいたのである」(1964、pp.259-261)。

松本信広は「槃瓠伝説の一資料」という論考でつぎのように述べている。すなわち、「犬の名称が瓠と云ふ植物名称をとるのも瓠が水と因縁深い霊物であったからであらう」(松本信広、1942、P.779)と解釈している。「瓠」とは水を入れる器としてのヒョウタンの意味である。

そして松本はつぎのように結論づけている。すなわち「要するに槃瓠伝説は複合神話でありその中に犬のトーテム崇拜の如き形式を具へながら實は犬の霊性を通じて水の信仰と密接な関係あり後者を通じて瓠の崇拜が働いてをり恐らく後者の方が此種族の古き信仰を語るものではないかと考えられる。」(松本信広、1942、p.789)と指摘している。

さらに、鈴木健之は「古代における導犬の概念について」という論文で多くの犬と水との関係する論考(たとえば柳田国男の「犬が水の在り処を教へたといふ方の話は方々に在る」など)を紹介した後、つぎのようにまとめている。すなわち、「犬が水源を発見したという話は、きわめて示唆的に思われる。現実にこの動物が地下の源泉をさがしあてたことは十分に想像し得る。犬は人間に見えざる、水が通じている地下の世界を察知できた」(鈴木建之、1979、pp.205-212)と指摘している。

このように犬と水とが関連性のある記述がとても多いことが分かる。

## 7 犬を使つての雨乞い

『天中記』卷三には、唐韋絢の『劉賓客嘉話錄』を引用して、つぎのような文章がある。すなわち「投犬。舒州灤山下、有九井、其實九眼泉也。旱則殺一犬投其中、大雨必降。犬亦流出焉。」と記録されている。犬を殺してから、大きな泉に投げ入れている。そうすると犬が冥界に力があるので、必ず雨が降るといふ。すなわち雨を降らせる祈禱のために、犬が殺されている。

他に桂小蘭は「漢代冬の季節の雨乞い儀式で水神を祭るにはすでに六匹の黒い仔犬が犠牲として使われていた」と指摘している。(桂小蘭、2005、p.236)

さらに、李璇と陳開林も、「自有文字記載以來、祈雨方式就明目繁多，或以身獻祭，或率巫舞霧(中略)。其中有意思的是古人用犬作為溝通人神的媒介，祈禱天降甘露，解民紓困」とあり。この文章を要約すると、人類史上、雨を祈る方法いろいろあるけれども、その中には犬を使う方法があった。そのタイトルからも分かる通り、雨を降らせるために犬を用いている。(李璇、陳開林、2015)

このように犬と雨乞いの関連性のある記述がとても多いことが分かる。古代で、犬は日照りで雨が不足する時は、雨が降るように、犬を使つて、雨を祈禱していたことが、多くの資料によって指摘されている。

## 8 草で編んだ犬の登場

『淮南子』で、「聖人用物，若用朱絲約芻狗，若為土龍以求雨。芻狗待之而求福，土龍待之而得食」(『淮南子』、卷十六、説山訓)。このように草(絲)を使つて犬(狗)をつくり、幸福を求めている。

古代人は草で犬を編んで「芻狗」(草犬)をつくる。この「芻狗」の言葉も多くの詩句に出て来る。たとえば、劉禹錫の『漢壽城春望』で、「漢壽城邊野草春，荒祠古墓對荆榛。田中牧豎燒芻狗，陌上行人看石麟。華表半空經霹靂，碑文才見滿埃塵。不知何日東瀛變，此地還成要路津」(『全唐詩』、卷三五九)。このように草の犬は民間で広く普及したので、詩句にも登場したのである。

## 四 結論

現在の中国における一般的理解としては、鬼は人間に災いをもたらす。それに対して、犬は驅鬼除災の機能をもっていると思われる。そのため、中国人は犬は縁起の良い動物であり、もし誰かの家に突然一匹の犬が来たら、主人は喜んでそれを引き取り、結果として財福をもたらすと信じるところがある。しかしながら、中国の古代の文献を丁寧に読み込んでみると、このような現在の一般的理解を支持する側面があるものの、それとは異なった見解、また、矛盾する見解があることも分かった。それを以下に整理してのべることにしよう。

まず以下に、日本との差異を意識しながら、古代中国の犬についての考え方をまとめよう。犬に対する基本的な対応であるが、日本では犬の墓をつくったりして、犬に対するいたわりの感情が出ているが、古代中国では、犠牲の犬として、犬が献じられている。それもときには、一度に多数の犬が献じられている。古代中国では、犬の血を使うことがあるように、犬を犠牲獣として殺すことが少なくない。

日本でも古代中国でも白い犬が注目されている。日本は文献を通じて、古代中国の考え方を受け入れたが、日本での白い犬への注目は中国の白い犬への注目の影響であるとは、現在の資料では言い切れない。日本では伝統的

に犬に限らず、白ということに特別な配慮を行ってきたからである。

1) 犬は人間に対して忠実な動物として、日本でも中国でも位置づけられている。これは共通点である。ただ、日本では素朴に人間に対して忠実な犬という位置づけであるが、古代中国ではやや込み入っている。中国では、本来人間は、他の人間(おそらく主人などの権力者)に対して忠実、すなわち「忠義精神」をもたないといけないのだが、それを本当に実現しているのが犬だ、という言い方になっている。その例を本文の「忠実な導犬」で紹介した。そこでは、犬は主人を心配して自分の「餌を食べようとしなさい」というような犬の美談になって記されている。

2) 古代中国では、犬は生者を守るためだけではなくて、死者をも守護すると考えられていた。当時、地中には悪霊がいると信じられていたために、どうしても亡くなった人を守護するものが必要とされ、それが犬殉葬となったのであろう。ひとりの人間のために多数の犬を献じることも行われた事実は、逆にどれほど地中の悪霊を恐れていたかが分かる。

事例にあった「犬が主人の身代わりになる」という事例は、このような守護の変形とみればよいかもしれない。

3) 犬は魔よけや厄除けとして信じられ、そのために犬を殺したり、ドアにその血を塗るということが行われた。犬を殺したり、犬の血にマジカルな力があるという発想は、日本ではみられない。あえて言えば、日本では赤ん坊のおでこに赤字で犬という字を書く習慣をもつ地域があるが、これを血と結び付けるには少し無理があるだろう。日本では犬は「辟邪能力」があり、産育習俗と関連性があるという研究がある。古代中国では、産育との関連性はいまのところみつけれ

いない。中国古代の魔よけや厄除けというのは引用した文献にあるようにとんでもない悪害を防ぐためである。

4) 犬には予知能力がある。悪霊による異変をいち早く察知する能力のことである。この犬がもつ特殊な能力評価は、「天狗食日」の話にも現れている。

5) 犬は水とのつよい関連性がある。これは日本にもみられる信仰である。ただ、中国固有の考え方として、水が地下の世界に通じているので、水脈を経て地下の世界を察知する能力があるというものである。この固有の考え方が、おそらくまた中国古代の信仰であった犬が雨をもたらすという雨乞い信仰を生み出したのではないだろうか。この場合も犬は殺されて泉に投げ込まれている。

これら五つの特徴に共通することとして、古代中国では悪霊(鬼)に対する脅威感が強く、それを防いでくれるものとして、犬に期待するところが大きかったといえる。それを防げるだけの特殊能力を、人間は犬に期待したわけであり、それは犬は予知ができたり、正邪を判断できる人間にない能力をもっていると信じたことを根拠にしている。そしてなんといっても犬が人間に忠実であることが、犬に大きく期待したことと関連性があるだろう。

ただ、結論の冒頭に述べたように犬は日本では大切にされたようであるが、古代中国では、殺されることが多かった。犬が死ぬことによって、冥界で悪霊などと戦えたのであろう。しかし、それは生きている犬にとっては不幸なことで、本文の最後に紹介したように、献ずる犬の不足が生じ、草で編んだ犬が登場することにもなってしまったのである。



## 参考文献

### 日本文献（五十音）

- 石田有沙、「日本史における犬のイメージについての研究」、『寧楽史苑』、第56号、2011年
- 伊藤清司、「犬と穀物」、『史学』、第23号、1967年
- 伊藤清司、『〈花咲翁〉の源流』、ジャパン・パブリッシャーズ、1978年
- 伊藤清司、「犬が田を耕す話」、『中国の民話』、大日本絵画株式、1981年
- 王鑫、「天狗食日(月)考」、『怪異・妖怪文化の伝統と創造—ウチとソトの視点から』、第45巻、2015年
- 王貝、「中国と日本の変身譚の歴史的変遷に関する考察：狐、蛇、虎、犬、亀を中心に」、大阪大学大学院言語文化研究科、博士論文、2015年
- 菊池健策、「イヌをめぐる民俗」、『民俗学の進展と課題』、1990年
- 桂小蘭、『古代中国の犬文化』、大阪大学出版社、2005年
- 白川静、『中国の神話』、中央公論新社、1980年
- 菅豊、『人と動物の日本史』、吉川弘文館、2009年
- 菅豊、「中国でつくられた動物たち」、『アジアを知れば世界が見える』、小学館、2001年
- 鈴木健之、「古代における導犬の観念について」、『東京学芸大学紀要』、第2巻、1979年
- 畑田栄三、『日本の守り』、池田書店、2011年
- 田名部雄一、『犬から古代日本人の謎』、PHP研究所、1985年
- 谷口研語、『犬の日本史』、PHP研究所、2000年
- 直江広治、『中国の民俗学』、岩崎美術所、1967年
- 中島由佳、『ひとと動物の伴の心理学』、ナカニシヤ出版、2015年
- 二階堂善弘、『アジアの民間信仰と文化交渉』、関西大学出版部、2012年

沼田陽一、『イヌはなぜ人間になつたのか』、PHP 研究所、1990 年  
松本信廣、「槃瓠伝説の一資料」、『加藤博士還暦記念—東洋史集説』富山房、  
1942 年

## 中国文献(ピンイン)

崔逸飛、「中国細犬文化」、『中国工作犬業』、2013 年第11期  
紅河彝族辞典編纂委員会、『紅河彝族辞典』、2000 年  
李璇、陳開林、「以犬祈雨風俗成因考論」、『西華大学学报(哲学社会科学版)』  
2015 年第4期  
柳士同、「从犬儒到儒犬」、『博覽群書』、2012 年第10期  
譚步曇、「中国上古犬耕的再考証」、『中国農史』、1998 年第2期  
陶立璠、「人类犬文化考証」、『中国工作犬業』、2004 年第1期  
滕磊、「中国袄教芸術犬神形象」、『故宫博物院刊』、2007 年第1期  
王麗華、「中国早期社会的犬文化」、『農業考古』、1992年第3期  
魏舒娟、「中国犬文化溯源」、『新象郷学院学报(社会科学版)』、第25号、  
2011 年  
武庄、「先秦時期家犬研究的現狀与展望」、『南方文物』、2014 年第1期  
袁珂、『中国神話伝説』、世界図書、2012 年

## 歴史的史料

### 日本(五十音)

『今昔物語集』、岩波書店、2002 年  
『日本書記』、岩波書店、1965 年

『風土記』、秋本吉郎校注、岩波書店、1993年

## 中国

『山海経』、陝西師範大学出版社、2012年

[西漢] 『史記』、司馬遷、中国華僑出版社、2013年

[西漢] 『淮南子』、上海古籍出版社、1988年

[東漢] 『風俗通義』、商務印書館、1993年

『搜神記』(日本語訳)、平凡社、1964年

[宋] 『太平廣記』、齊魯書社、1983年

[北宋] 『資治通鑑』、壹灣商務印書館、1957年

[明] 『天中記』、(CD-ROM版『文淵閣四庫全書』による)

## 【注】

1) 人間と動物の関係のうち、本稿に関係する犬と動物との関係について、以下に簡単に述べておく。

世界各地であまり異なることなく、人間が生活しているところには、必ず犬がいる。比較的古くからあるものとしては、その役割として、番犬、牧羊犬、狩猟犬、労役犬がある。またやや新しいものとしては、救難犬、軍用犬、麻薬犬など。それ以外としては、見世物用や婦人の愛玩用にも、さらには食用にもなるなど、幅広く利用されてきた。

近代になってからは、警察犬、警備犬、盲導犬、麻薬探知犬、災害の介助犬(ただし「日本だけ」)などもあらわれた。そして、近年には犬を飼うことの心理的、医学的、社会的効用も注目されるようになってきた。

犬の種類は、世界公認のものとしては130種類前後がある。地域的な特性を

もっているものも含めると、その犬種類は500～600種になるともいわれている。その体型・外貌も、大は体重100キログラムちかくのケースもあるし、小は人の手のひらにのるチワワまで、その他、毛の長いもの、短いもの、鼻のとがったもの、つまったもの、足も胴も細長いもの、短足胴長のもの、実に変化に富んでおり、同じ種でこれだけの変異がある動物は、唯一犬だけである。

この犬種の多様さは、もともと犬が人為的に改良されてきた動物だということを示すものであり、人間は自分たちの好きな形に応じて、多様な形質の犬をつくってきたのであった。

「犬好き」という人間が存在するのは、昔からのことであり、他方「犬が嫌い」という人間もいるだろう。ただ、社会全体としての犬とのかかわりかたを見る場合、どこの犬でも、地域的、歴史的な違いがあり、その時代に特有のものがある。では、中国と日本の社会は、犬に対してどのように接点があるだろうか。近年はともかく、それが古代になると、日本と中国ではかなり異なるものがあるだろうと思われる。

犬は私たちのもっとも身近にいる動物であり、四足の動物を代表するものは犬である。犬を飼うことは自然と触れ合うことでもある。犬は人間と社会との媒介となることも多い。しかし、しばしば、中国と日本の歴史を振り返ると、犬に対して無頓着かつ冷淡である場合も少なくない。犬についての無頓着さは、そのまま動物全体への無頓着につながっているかもしれない。さらには、自然に対しての無頓着にもつながっているのではないだろうか。

中国と日本の人間社会が、ただ表面のペットを飼うという関心に終始するのではなく、犬たちとのよりいい関係をつくり、さらに積極的に犬を役立たせるためには、中国人と日本人と犬との交流の研究史を、考えてみる必要があると考えて本稿を手がけた。